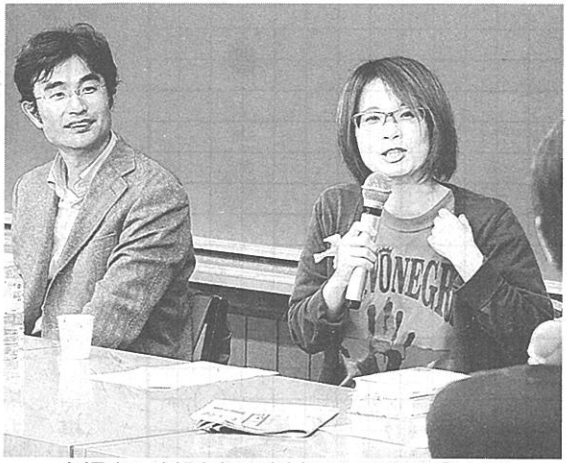
2015.11.8 中日(教育版29)

作家津村さんと京大准教授 対談

現代の食卓 違和感訴え



来場者と対話する津村記久子さん(右)と藤原辰史さん＝京都市左京区の京都大で

芥川賞作家の津村記久子さん(三七)と、ナチスを中心に戦争史を研究する京都大の藤原辰史准教授(三八)が、「現代の食卓」をめぐって京大で対談した。二人は理想の食卓を「母の愛情」や「家族の幸せ」と結び付ける風潮への違和感を共有する。

京大人文科学研究所の市民講座「人文アカデミー」の一環で、働く若者の生きづらさなどを詳細に描いてきた津村さんを招いた。

津村さんは近作では食卓や台所もテーマにしている。インターネットのレシピサイトには、調理法と一緒に「夫がすごく喜んで食べてくれた」といった投稿者の書き込みが多いことを例に、「食べることに物語を持ち込んで、自分の立場の優位さを認めさせているように思える」と現代の食を分析した。

藤原さんはナチスが台所を「主婦の戦場」として、料理法やごみの出し方などにまで介入した政策を研究する。日本の食育政策にも「お母さんが子どものためにという家族像や物語を国家が強制しているようで気持ち悪い」と話した。

二人は「食べることを人間関係の駆け引きの場にせず、もっと自由に楽しんだ方がいい」と対話を結んだ。会場からの発言では、女性が「娘が孫のために毎朝何時間も無理してキャラ弁を作っているが、単一の愛情表現を強要されているようだ」と二人に賛同した。

（森耕一）